



# 動物の「食」を考える

科学教育研究会講師

森 広 信 子

野外の調査地に置いてある目印用の杭の先が、何者かに噛みつぶされていることが、時々ある。野生動物の仕業以外に考えられないが、食物ではないものを、なぜ齧るのか？ 石鹼が齧られるのは、明らかに食物として（油脂の塊として）齧っているが、塩化ビニールのパイプが食べられるわけではなく、実際、噛みつぶしているだけで、食べた跡はない。

口に入れて味を確認するのは、見慣れない「もの」が何なのか、確認しているのだろう。私たちは、食物ではないものを口に入れるのは、衛生上の観点からもいけないことだと学習して（させられて？）いるが、味は、食物かどうか判定する手段の一つのはずであり、食物を周囲の人間から教わって覚えるヒトとは違って、野生動物は、初めて出会ったものを、何物なのか自分で判定し、学習しなければならない。だから見る、嗅ぐ、触れるのに加えて、齧って味をみるのも、大事な手段になる。ヒトでも小さい子は何でも口に入れて確認する、野生動物のような行動を残している。舌の感覚は、味だけでなく触覚も他の場所より優れているから、口に入れてみて調べるのは、理にかなっている。

環境の中から、食べられるものを探し、選択し、食べることは、動物の生活の根幹に関わることで、食べることで生きるのに必要な物質とエネルギーを得続けなければ、生きることができない。親からある程度教えられる面はあるだろうが、季節変化する食物を全て教わることは

できないから、自分で新規に餌を開拓する必要はある。またこういう学習ができるから、環境の異なる地域でも、必要なだけの餌を探し出して食べて、生き続け、繁殖することもできる。

食物を選ぶ上で、何が大切だろうか？ 現在のヒトの価値基準はだいぶ歪んでいるから、参考にはならない。第一、「体にいい」といわれるものを見ると、その歪みがよくわかる。ほとんどは食べ過ぎを抑制するものが体にいいと言われる。たとえば低カロリーが「ヘルシー」とは、どういうことか？ 体のエネルギー収支がマイナスになったら、生きていけないはずだ。これは、十分な量の食物を食べられることが当たり前、その中で選べるのが当たり前だということが前提になっているからでしかない。ヒトも以前は十分な量の食物が食べられないことが健康を損ねる原因になっていた。そんなときに低カロリーの食物は、ヘルシーではありえない。

さらに、食物を入手する手段も、特殊化していて、お金を出せばいくらでも好きな食物と交換ができる。必要なのはお金を手に入れる手段であって、食物を手に入れる手段ではない。食物を自然界から取るのは、その道のプロなので、食べるだけのヒトは何の知識も技術もいらないし、時間をかける必要も、危険を負う必要もない。一つの食物のために、専門職が分業して効率よく食物を生産してくれている（自分が消費するよりも、はるかに多くの食物が生産

される)。だから、一つの食物の背後に、どんな努力があるのか、知ろうとしなければ知らなくて過ぎてしまう。有り余る食物の中から何を選ぶかは、個人の好みの問題になるが、あまりにも好みだけで食物を選択しては、必要なものが不足して健康を損ねるようなことも起こる。

動物の生活は食べることを基盤にして成り立つ。何を食べるかは大事な選択だが、それ以前に、どれだけ食べられるかが、食物を決める際の重要な価値基準になる。必要なだけの量は食べなければならない。どんなに美味しい食物でも、少ししか食べられないのでは困るのだ。選択の余地が、いつもあるとは限らない。最もよい餌がなければ、あるいは少なければ、劣った餌で補うしかない。

では、餌として価値があるものとはどんなものか？

「楽をして、美味しいものを食う」(伊沢紘生)のがニホンザルの生活の基本。ニホンザルに限らず、動物一般にとってこれは真だろうが、この言葉から我々が想像することは、この言葉で言おうとしていることとは、少し違っているかもしれない。なぜなら、ヒトの「食」に対する感覚は、豊かさゆえに歪んでしまっているからだ。

まず、美味しいものとは何か。もちろん、味が好みに合う良いものだということが、味覚は最初に言ったように、外界にあるものに何かの判断をする手段としての感覚の一つだから、餌としての価値を判定する際には、必要なもの、良いものには好ましい感覚を、良くないものや毒物には好ましくない感覚を生じるようになっているはずだ。ヒトの感覚では、甘みは糖(エ

ネルギー源)、うまみはアミノ酸など(蛋白源)、毒にもなる植物の二次代謝物には苦味を感じるものが多い。新しい食物に出会ったとき、味を手掛かりに食物の質を評価するが、このセンサーは時々騙されて、栄養にならない人工甘味料に惹かれたりする。またこのセンサーに引っかけられない毒には、中毒する。センサーとしての味覚は、子供の方がしっかり持っていて、ある程度の好ましくない味を含んだ「大人の味」には、子供は馴染めない。

ヒトの味覚と野生動物の味覚にズレがあるのは、進化してきた食物環境が異なるので、当然だろう。高カロリー、高たんぱくの食物を求めると、自然なことだ。

次に、「楽をして」には、大きく二つの意味がある。一つは、食物を食べるまでにどれだけの手間がかかるか、探す努力から始まって、食べられる部分を選び出し、食べない部分からより分け、噛み砕き、飲み込んだら、後は消化器官の仕事になる。生きた動物を捕食する場合には、かなりの技術と身体能力を必要とする。また、いくら美味くても、滅多にない食物は、当てにできない。食べるまでに手間がかかり過ぎるものも食物としてはよくない。食物は、毎日必要なだけの量は、必ず食べなければならない。

動物の食物とは、他の生物に他ならない。生物はすべて、誰かの餌になることは望まない。当然、何重にも防衛の手段を巡らせている。植物も生物だから、ちゃんと自分を守っている。その一つが毒物の生産なのだ。そのような生物を食べるには、毒に当たらずに食べて消化するための体の準備が必要だし、探してかじりつくだけの感覚器官と運動能力が必要になる。植物は動物に食べてもらうための果実を作ることはある。しかし果実は、いつでもあるものではない。

い。一年以上生きる動物は、季節的に移り変わる食材のうちから、探して選り分けていかなければならず、全体として食べられるものが不足する時期も存在する。

食べるまでの手間は、食べる量に直結する。採食効率の悪いものは、採食に長時間かけなければならないことを意味する。例えばサルやシカの樹皮食は、冬場には樹皮（といっても内側の柔らかい部分）が樹木の栄養貯蔵庫になっているとはいえ、薄い皮を歯で削って食べるのは、時間と根気のいる食事だ。もっと食べやすいものがある時には、あえて樹皮を食べないだろうとは、容易に想像できる。

その時期、その場所で、何が食べられるかは、いつも同じではない。そこで何を食べたか、知る手段はあるが、そういう、食べたものの長いリストを作ったとしても、その動物の食生活を決めているものが何かは、実はわからない。同じ場所でも、毎日そこで食べていけば、食物の量は減ってくる。ある範囲に散らばっている食物を探し出す手間は、だんだん増えてくる。その分、その食物の価値は下がっていく。まだ少し食物が残っているとしても、動物はそこで食べるのをやめて、ほかの場所へ移動することになる。

食べることには、常に量の問題が付いてくる。低栄養の餌ならたくさん食べなければならないし、それだけ食事に長時間を割かなければならない。探すのが大変な餌も同じで、必要量を満たすのに、長時間かかる。1個1個が小さい食物も、同様に必要量を食べるのに時間がかかる。もし丸一日を費やしても必要量が満たされないなら、動物は痩せていって、餓死するかもしれない。しかも餓死寸前の弱った動物は、捕食に対しても弱い。少量を手に入れるのはあまり努

力が要らなくても、十分な量を食べるのは、時に楽ではない。楽に手に入らない食物は、動物の生存を危うくしてしまう。手に入れやすい食物、食べるのに楽な食物は、その食物が美味いかどうかよりも、はるかに大きな価値を持つことになる。

「楽をして」のもう一つの側面は、リスクを回避することだ。食べるために危険を冒して、そのために命を落としたり、しばらくの間、食べることに不自由するような怪我をしては、何の意味もない。

ヒトは、捕食される可能性を感じる場面はほとんどないから、食の安全といえば、添加物や異物の混入を思い浮かべるが、野生動物には、捕食される可能性が常にあって、安全とは自分が捕食されないことであり、食べながらも警戒を怠らないでいる必要がある。しかも、ヒトは野生動物に対して強力な捕食者だったから、ヒトに対して動物が一定の警戒をするのは当然で、ただ最近では、ヒトがいつも敵としてふるまうのではないと知った動物も生まれている。たとえヒトがどんな相手か知らなかったとしても、自分と比べて大きな動物には、一定の警戒をするべきだろう。

実際に、動物は安全なところで食べたがる。もし身を隠せるところに食物を運ぶことができるのなら、そうするし、開けた草地よりも森林のような、身を隠せて、捕食者が来た時にすぐに逃げ隠れできる場所にある食物のほうを好む。短時間で十分な量を食べられる食物は、危険に身をさらす時間を短縮できるから、味以上に価値が高い。

農作物への被害は、単純に動物が増えた結果と捉えることはできない。なぜなら、農作物を食物として選択することは、それが食物だと認

識していることが前提で、ほかの野生植物と同じく、試食して美味しい（高栄養な）食物だと、すでに知っていなければならないからだ。これは本能的にわかるものではない。さらに、ヒトの出入りする場所に行くというリスクを負うことになるので、それが克服できる道が開けていなければならない。これも、何度も接近して学習したのでなければ、できない。その結果、リスクを低く評価してよいと認識して初めて、農地が食事場所になる。ただし、本当に他に食物がない場合は、危険を冒してでも農地に食べにくることはある。この場合、単なる脅しで動物を追い払えることはない。実害のない脅しには、すぐに学習して慣れてしまうからだ。市街地への侵入は、今のところ偶然のようだが、食物が十分あれば、定期的に来てくるか、定住する可能性もある。

「菜をして、美味しいものを食う」には、食物の質と量を評価し、手に入れやすさとそれに伴

う危険を評価して、その時の、最適ではないかもしれないが、より良い食物を選択しなければならないことになるし、実際にそのような選択があるということが、一部の動物で検証されている。

食物の価値とは、相対的なものだ。その時にある、食べられるものの中からしか選べないから、かなり質の低い食物で妥協しなければならない場面は、一生の間には何度もあるはずだ。それでも、食べないわけにはいかない。ヒトでの食物の好き嫌いとは、意味が全く違う。そして、食物が少ないときにたまたま食べたものと、食物が豊富な時に選択して食べたものでは、動物の生活の上での価値は異なるし、「好み」の一言で片づけられる性質のものではない。

そして、食物についてくる量の問題と、リスク回避の問題が、食物選択にあたって、時には食物の質よりも大きな問題になっている。